

東アジア地質構造図について

佐藤 正¹⁾

今年の1月から2月にかけて, ほとんど毎日のように地質調査所を訪れていた。遊びに行っていたわけでも, 文献を読みに通ったわけでもなく, れっきとした仕事をしに行っていた。仕事は書きかけの東アジア構造図の原稿を仕上げることだった。この図は1m×1.25mという大きなものなので, 狭い自宅には広げて作業する場所がなく, 止むを得ず毎日流山の自宅から調査所に日参することになった。そもそもこの仕事はCCOP^{注1}とCPC^{注2}の仕事で, そのどちらも地質調査所がかかわっているから, そういう意味では調査所で図を書くのに別に不思議はないのだが, 調査所の職員だったこともない人物が, しょっちゅう所内にいるのは何事かと不審だった向きもあるだろう。

実をいえば, このプロジェクトは1986年に正式に発足した, もう足掛け9年にもなる国際プロジェクトで, かなり大がかりな計画である。それももう少しで最終段階に入るところまで来たので, 計画の経緯や内容をかいつまんで紹介しておくのも悪くないと思いたち, 編集委員の要請に応じることにした。

プロジェクトの内容

この計画は正式には「東アジア地質構造図プロジェクト (East Asia Geotectonic Map Project)」ということになっている。このプロジェクトを実際に行うグループは地質構造図ワーキンググループ (Working Group of East Asia Geotectonic Map Project) と呼ばれ, 略してWGGMなので, プロジェクト全体の方までWGGMマップと言った方が簡単だし, それに今ではその方の通りがいい。そこでこの小文でもWGGMマップということにする。

さてこの計画は, 第1図に示したように東アジ

ア地域を8区画に分けて, その各々について200万分の1の縮尺で地質構造図をつくらうというものである。ベースになる地形図は, World Data Bank IIをもとにアメリカ地質調査所が調製した地形図で, マイラーに薄い青色で海岸線, 国境線, 河川, 等高線, 等深線が印刷されている。これを作業用に用いて, この上に地質構造図のをせようというわけである。東アジアの地質構造図はこれまでもたくさん出版されており, CGMW (世界地質図委員会) や UNESCO/ECAFE (ESCAP の前身) あるいは中国地質鉱産部などが出した構造図が有名である。CPC (環太平洋エネルギー鉱物資源理事会) も Tectonic Map シリーズの出版を始めており, すでに南西区画のそれは出版済である。

そういう点では, この計画は屋上屋を重ねるような感じがしないでもない。しかし, これまでのものは大体500万分の1とか1000万分の1などの小縮尺の構造図で, 地域の地質構造の概要を見るにはいいが, 実際にある地域の開発を行うといった段階になると細かな情報が決定的に足りない。

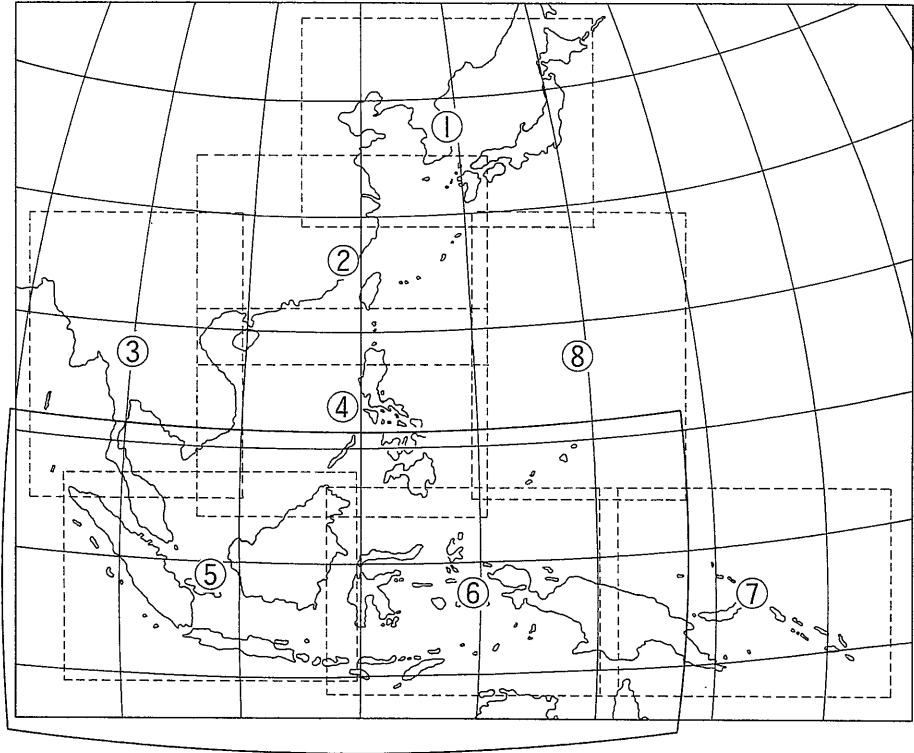
今回のものは縮尺をもっと大きくして200万分の1に設定している。私の感じでは, 縮尺が500万分の1とかそれ以下のものと, 200万分の1のものとは図の性質が違ってくる。たとえば, 1,000万分の1では細かい点をすべて省略して, 大筋を表せばよかったものが, 200万分の1になると, ずっと小さい構造単位も正確にあらわすことが求められ, より精細なデータを必要とするようになる。またある地域の構造を読み取るには, どんなに小さい露頭

キーワード: 東アジア, 地質構造, 構造図, CPC, CCOP

注1 CCOP: Committee for Co-ordination of Joint Prospecting for Mineral Resources in Asian Offshore Areas—アジア沿海地質資源探査調整委員会

注2 CPC: Circum-Pacific Council for Energy and Mineral Resources—環太平洋エネルギー鉱物資源理事会という非政府非営利団体

1) 筑波大学名誉教授:
〒270-01 流山市東初石 3-126-55
東初石パークホームズ403



第1図 東アジア地質構造図の各シートの配置.

でも、構造的に意味のあるもの、たとえば基盤上に不整合で覆われた被覆岩層のようなものを除くわけにはゆかない。また図から読み取る情報ももっと实际的、具体的なものが求められるようになる。そうすると図上にあらわす単位の区切り方から考え直す必要が出てくる。そういう意味でこの構造図はこの地域では新しい試みであるかもしれない。

もともとこの計画は、東アジア資源評価計画の2本の柱のうちの1本として企画されたもので、もう一つの柱である盆地解析の図に対してその地質構造的な背景を提供するという意義が持たされている。この辺の事情は、以下の計画の歴史の中で触れることにしよう。

東アジア地質構造図プロジェクト発足の経緯

かいつまんでこの計画が実行されるまでのいきさつを書いておこう。実のところ、計画が論議されたごく初期のころの事情を私は詳しくは知らない。それはCCOPやCPC(その中のCPMP^{注3})での討議から生まれたもので、私はそのどちらにも正式な委員として加わったことがないので、記録から判断す

るしかない。私はこの計画の全体がほぼ固まりかけたころ、アカデミックな部分の面倒をみてくれないかと当時地質調査所次長だった井上英二さんから頼まれてこの仕事に加わった。生来のお人好しで、気楽に安請け合いをしたが、これほど大ごとになるとは夢にも思わず、それ以後もう6-7年にもなるのにまだこの仕事にかまけている。

このプロジェクトはCCOPがIUGS^{注4}、CPCと協力してやることになった東アジア資源評価計画(East Asia Resources Assessment Programme)の2本柱の一つで、もう1本の柱は東アジア堆積盆地解析プロジェクトである。この計画が提案されたのは1984年開催のCCOP総会だったようである。それはCCOP地域鉱物資源評価計画の一環として翌年1985年中国広州で開かれたCCOPの第22回総会で採択された。その時にこの計画はIUGSとCPCと共同で実施されることになったと、CCOPの議

注3 CPMP: Circum Pacific Map Project. CPCの中に設置されている環太平洋地域の地図編纂プロジェクト。

注4 IUGS: International Union of Geological Sciences—国際地質科学連合という名の純粋な国際学術団体。日本も加盟。

事録には記されている。この資源評価計画は東アジア堆積盆地解析プロジェクト (East Asia Basin Analysis Project) と東アジア地質構造図プロジェクト (East Asia Geotectonic Map Project, WGGM) を含み、この両者は互いに補いあう性格のものと考えられた。

1986年4月、クアラルンプールで第1回の資源評価計画ワーキンググループ(WGRA)の会議が開かれた。ここで、盆地解析プロジェクトを発足させること、地質構造図プロジェクトを創設することが討議された。構造図プロジェクトは、CPMPの北西区画パネルが作業をする方向だったようであるが、この会議には日本の代表が出席していなかったため、急遽北西区画パネルの中で討議する必要に迫られた。そこで、北西区画パネルの国内会議が1986年7月25日に地質調査所で開かれ、大筋としてこの計画の遂行を引き受ける方向で討論が行われた。ただし(1)ガイドラインは独自で設定すること、(2)費用はCPMPなど国際的な機関から提供されること、という条件を認めてもらうよう、同年8月のシンガポールでのCPMP会議で提案することになった。

シンガポールでのCPMP会議は、予定通り開かれ、ここで正式に北西区画パネルが主導して計画を実施することの要請があった。またCCOPも支援する約束がえられた。上の条件も提出されて了承された。その後北西区画パネルの日本国内会議での了解を経て、最終的には1986年11月にパプア・ニューギニアのマダンで開かれた第23回CCOP総会およびCPMP北西区画パネル会議で、東アジア構造図プロジェクトの実施が決定された。これを受けて、1987年6月にホノルルで開かれたCPCの会議で、井上北西区画議長が地質構造図プロジェクトを受け持つWGGMの活動案を提出した。

このように、始めてこの計画が言い出されてから、2年余りの年月を経て、ようやく実施の決定にいたったのである。この経過を見れば分かるように、このプロジェクトはCCOPとCPMPの共同計画の性格をもっており、実際その後も作業図の供給はCPMPが、会議費や旅費はCCOPが供給するといったように共同して作業が進められてきた。活動の進捗状況もこの両者に常に報告してきた。実際の活動に当たっては、この両機関の支援のほかにも、各

国の有形無形の支援があったのは言うまでもない。

WGGMの構成

さて、このプロジェクトは日本を始めとして多数の東アジア・東南アジア諸国をカバーする地域を対象とすることになるので、到底少人数ではできない。そこでプロジェクトがスタートすると同時に、当時のCPMP北西区画議長の井上英二氏が関係各国にその任にあたる人の推薦を求めた。井上議長の発案で、各国の代表にはNational compilerという名を、全体の編纂にあたる佐藤はGeneral Compilerと呼ぶことになり、その名称はその後も引き続き用いられている。

最初にコンパイラーの指名を依頼した文書は、井上議長名で1987年5月15日付で発送されている。これに対する反応は割合素早く、同年の7月から返事が集まりだし、8月末までに日本、インドネシア、マレーシア、フィリピン、タイ、ベトナムから最初の委員の指名があった。つづいて韓国、中国、パプア・ニューギニアからも指名があり、1989年11月工業技術院で開かれた第1回WGGM会議までに関係9ヶ国の委員の人選が完了した。しかし、その後各国内事情から当初の委員が交代したところも少なくなく、最終的に1992年に一応原図が完成した時の委員は以下ようになった。(所属は当時)

General compiler : 佐藤 正 兵庫教育大学

Chief compiler for marine areas : 本座栄一 地質調査所

National compilers:

Feng Zhiqiang, Guangzhou Marine Geological Survey, Guangzhou, China

Tohap O.Simanjuntak, Geological Research and Development Center, Bandung, Indonesia

脇田浩二 地質調査所

Hyen-II Choi, Korea Institute of Geology, Mining and Materials, Taejon, Korea

Khoo Hang Peng, Geological Survey of Malaysia, Ipoh, Malaysia

Steven T. S. Nion, Papua-New Guinea Geological Survey, Port Moresby, PNG

(後にこのプロジェクトから撤退)

Graciano P. Yumul, Jr., University of the
Philippines, Quezon City, Philippines
Saenganthit Chuaviroj, Department of Mineral
Resources, Bangkok, Thailand
Tran Van Tri, Geological Survey of Viet-
nam, Hanoi, Vietnam

このほかに各国でプロジェクトに公式あるいは非
公式に協力した人は多い。その方々の名を挙げてお
こう。所属は1992年でのものである。

日本：地質調査所：寺岡易司・久保和也・吉田史
郎・岡村行信・牧本博・三村弘二・粟田泰
夫・遠藤祐二

中国：Cui Shengqin, Institute of Geomechanics,
Beijing

Liu Guangding, Bureau of Petroleum Geol-
ogy and Marine Geology

Qiu Yan, Guangzhou Marine Geological
Survey

Li Tanggen, Guangzhou Marine Geologi-
cal Survey

Liang Xiu Quan, Guangzhou Marine Geo-
logical Survey

韓国：Kim Dong Hak, Geology Department,
KIER

Philippines: Guillermo R. Balce, Bureau of Mines
and Geo-Sciences, Quezon City

Raymundo Punongbayan, Philippine In-
stitute of Volcanology, Quezon City

R.D. Quebral, Bureau of Mines and Geo-
Sciences, Quezon City

CCOP: Weng Sijie, Petroleum Expert

He Qixiang, Technical Service Chief

WGGM 会議の経過

東アジア地質構造図プロジェクトが発足してから
最初の会合は、1987年8月に北京北東の懐柔で開
かれた国際会議(International Symposium on Tec-
tonic Evolution and Dynamics of Continental
Lithosphere)の機会を利用して開こうと計画され
た。しかし、この会合は結局開くことが出来なかつ
た。従って、実質的な第1回会議は1988年9月に
ITITの会議を機会に地質調査所で開かれた。この
会議には、参加国全部から代表が集まり、地質図編

纂のガイドラインの討議とともに、各国の地質構造
の概況が説明され、以後の活動の基本方針が承認さ
れた。この時の各国の発表の要旨は、地質調査所月
報第40巻第5号(1989)に集録されている。

この後、WGGMの会合は京都のIGCまでに4
回開かれている。どれも形式的な会議の形をとら
ず、実質的に原図を見せあい、凡例の修正や追加、
区分のしかたの訂正や、特に国境沿いで起きがちな
不一致を調整することに費やされている。CCOP
のやり方に従って、その都度議事録を作成して残し
てはあるが、議事録で活動がコントロールされるよ
うな会議ではなかった。

筑波での第1回会議のあと、第2回は1990年4
月にバンコックのインパラ・ホテルで開かれた。こ
の時はまだ編纂の基本方針が各委員に徹底しておら
ず、凡例の修正作業に多くの時間を費やしている。
またこの時に始めて各委員がそれぞれの受持ちの地
域の素案を持ち寄って見せあった。国境沿いの不
一致の調整も始められた。なお、この会議にはパプア
・ニューギニアの委員はとうとう顔をみせず、ど
うやらこのプロジェクトから手を引いたらしいこと
が明かになった。もっとも、パプア・ニューギニア
は第1回の会議のあと、ほとんど完成した原図を
私のところに送ってきて、それでこのプロジェクト
に義理を果たしたつもりであったのかもしれない。
その後も音沙汰はない。

第3回は1991年8月にバンコックのCCOPの中
で実質的な作業をした。この時期になると、もうす
でに色を塗った原図が大体出来上がっており、作業
は全体を統一することに絞られた。この会合は、旅
費の都合から Inhouse Training という名目で行わ
れ、宿舎も CCOP の近くの Sathorn Inn というベ
ンションで質素なものであった。

第4回は最後の仕上げの会合で、1991年11月バ
ンコックで開かれた。もうここでは最終調整の段階
に入り、提出された原図は私が日本に持ち帰って京
都のIGCまでに一応の完成にこぎ着けることにな
った。

さて、こうして集められた各国のコンパイラーの
労作は、京都のIGCの展示に出品することにな
ったので、私は原案を当時勤務していた兵庫教育大学
にもってゆき、そこでマイラーの基礎図の上にまと
める仕事をした。これは全くの手作業でなかなか

かが行かず、おまけに IGC の準備に大幅に時間を割かねばならずで、私の手だけでは間に合いそうもなかった。そこで一部のシートは当時兵庫教育大学の大学院生だった池崎文也氏(現在神奈川県立商工高)に頼んで原図をマイラーシート上に移す仕事をしてもらった。こうして、なんとか1992年8月の京都 IGC ではシート7と8を除く6シートの原案を展示することができた。さらにこれを機会に最終の WGGM 会議を IGC 期間中に京都国際会館で開き、打ち上げをした。

このあと、私は IGC の疲れを癒すのに大分長い時間がかかり、1993年の春には兵教大の定年退職などもあって、この仕事に打ち込むことが出来なかったが、その間、いろいろ考えた末、すべてを新しいマイラーシート上に描き直すことにし、手始めにインドシナ半島・タイ・マレーシアを含むシートⅢに取り掛かった。丁度1994年の3月末にベトナム・ハノイで CPC とベトナム地質調査所共催のシンポジウムが開催されることになり、CPMP からその際できたシートⅢを展示してシンポジウムで説明するよう求められたので、これを機会にこの仕事にふたたび取り掛かったわけである。これがこの拙文の冒頭にある毎日地質調査所に通うことになったことの起りである。

ところが、IGC の前の編集の時にすでに気づいていたことであったが、シートⅢはすべてのシートの中でもっとも複雑でそう簡単に調整できないことが明らかであった。このシートの中に入る国は中国、ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー、マレーシア、シンガポール、インドネシアと9ヶ国もあり、中国、ベトナム、タイ、マレーシアの各委員が作った原図は、国境を境にして区分や境界線がしばしば食い違い、1枚の地質構造図に仕上げるのには、それぞれの委員と個別に相談して食い違いを調整することがどうしても必要であった。そこで、CCOP から旅費を出してもらい、1993年の11月に中国広州を皮切りに、ハノイ、イポー、バンコックと移動して、次々に主な国の委員と個別に相談するというおまけまでついた。

ミャンマーはこのプロジェクトに最初から入って居なかったので、私が手持ちの資料(1970年代以降ほとんど新しい資料はないようである)を使って原案を作った。幸か不幸かハノイの国際シンポジウム

は都合で2ヶ月伸び、5月の末に開かれたので、原図はそれまでに完成し、シンポジウムの会場に掲示して参加者からのコメントをもらうことができた。図は好評で、多くの人からコピーを欲しいといわれ、CPC もこの図の印刷に前向きな姿勢をとるようになった。なお、原図が出版公表されるまでは、頼まれたコピーは遠慮してもらうことにお断りした。

構造図の編纂方針

この計画が論議され出したころの CCOP では、有名な W. Hamilton (1979) の Tectonic Map of Indonesian region の編纂方針をお手本にして、同じやり方を全域に広げるといった考えだったようである。この図はご存じの向きも多かるうが、Hamilton さん独特の解釈で統一されて書かれており、いわばかなり匂いの強い構造図である。それはそれで十分興味深いものではあるが、構造の解釈というのはうつろい易いものであるし、それに堆積盆地図とペアになった時あまり個人的な意見が強すぎるのは考え物である。そこで、編集責任者を引き受けたとき、なるべく客観的な図をつくりたいと私は考えた。テクトニクスというものには必ず解釈が入るから、100%客観的な図が出来るわけがないのはいうまでもないが、それでもなるべくならあまり主観的な解釈は避けて、多くの人があまり抵抗なく読めるような図にしたいと考えた。この方針は、CCOP や CPMP にも了承してもらった。このように、この地図の内容はできるだけ、事実をそのまま示すよう心がけて作られた。

具体的な編纂方針を始めて作ったのは1987年の6月ころであった。この基本方針は、その基調として CPMP の Tectonic Map シリーズの最初の図、南西区画の構造図の編纂方針を踏襲したものである。この最初の編纂方針は、以後具体的な作業に入ると直ちにいくつか問題点が明らかになり、WGGM の会議を行う度に補足や修正を重ね、最終的には次のようなものに落ち着いた。

その第1の大区分として次のような3区分を設け、さらにそれぞれの中を括弧内のように中区分した。

—活動地域の岩石(島弧地域火成岩、前弧地域堆積岩、付加プリズム)

—大陸地殻(基盤岩類, 造山性層序, 再活動被覆岩類, 被覆岩類)

—海洋地殻(海洋地殻構成岩類, 海台, 海洋島・海山の火山岩)

この分類, とくに中区分にはいろいろ問題が起きた。なかでも大陸地域の岩石の中区分は, 始め南西区画の構造図(オーストラリアのような安定大陸が大部分)で採用された区分—基盤岩類・変形した被覆岩類・被覆岩類—をそのまま使うつもりであったが, 作業を始めてみると東アジアのように変動帯の多い地域では実情にあわなことが分かり, 基盤岩類・造山性層序・再活動した被覆岩類・被覆岩類という4区分にした。

それぞれの中区分の下に図示する最小単位を決めなければならないが, 客観的な図をつくるという観点から, 単位を「重要な不整合で上下を区切られている一続きの部分」とした。たとえば, 西マレーシアのようにカンブリア系から三畳系まで本質的に一続きの層序は一つの単位にするというやり方で, 地殻変動に区分の境界をおいたわけである。

さらに, そのような単位の年代の表わし方は次のようにすることにした。

1. 各単位の年代を色であらわす。ただし, 地質系統によって色を指定するのではなく, 地殻変動の年代を表わすように色を決める。すなわち,

- 1-1) 基盤岩類では単位の時代全体を示す色で時代を表わす。(これは普通の地質系統の表わし方)

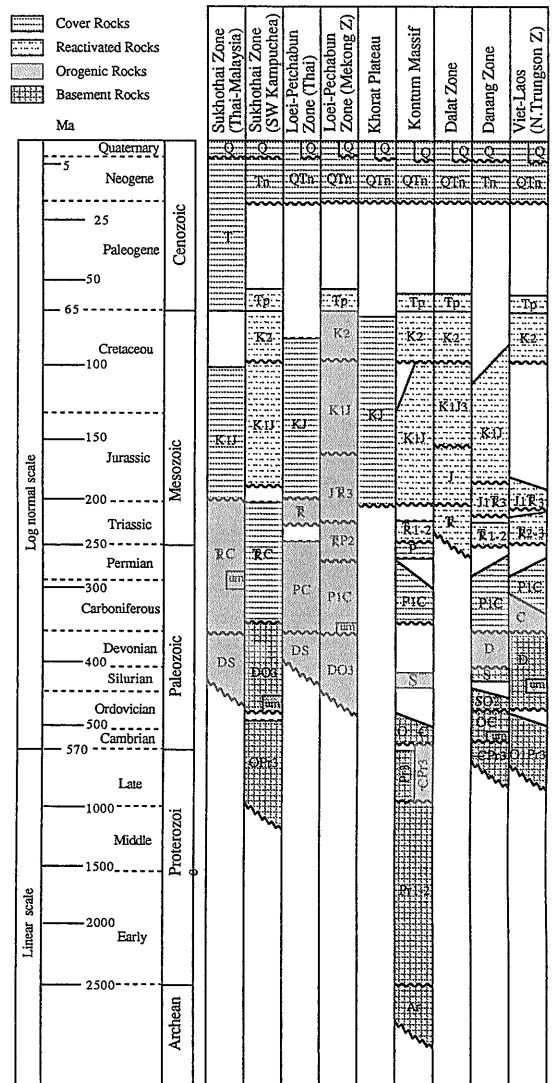
- 1-2) 造山性層序と再活動被覆岩類は変形の時代の色で表わす。(この単位がたとえカンブリア紀から始まる層序でも, 変形の時代がジュラ紀ならジュラ紀の色で塗る)

- 1-3) 被覆岩類はその堆積の始まる年代を時代の色で表わす。(地殻変動後, 何時堆積が始まったかを示す。白亜紀から現在まで堆積が続いても色は白亜紀のものになる)

2. 基盤岩類・造山性層序・再活動層序・被覆岩類の区分はパターンで表わす。

- 2-1) 基盤岩類はその時代の色で格子模様を分布域全面にほどこす。

- 2-2) 造山性層序は変動の時代の色で分布域を



第2図 地質構造図のTime/Space Plotの例。主としてシートⅢの第3図に示した部分のもの。パターンの意味は左肩に図示。

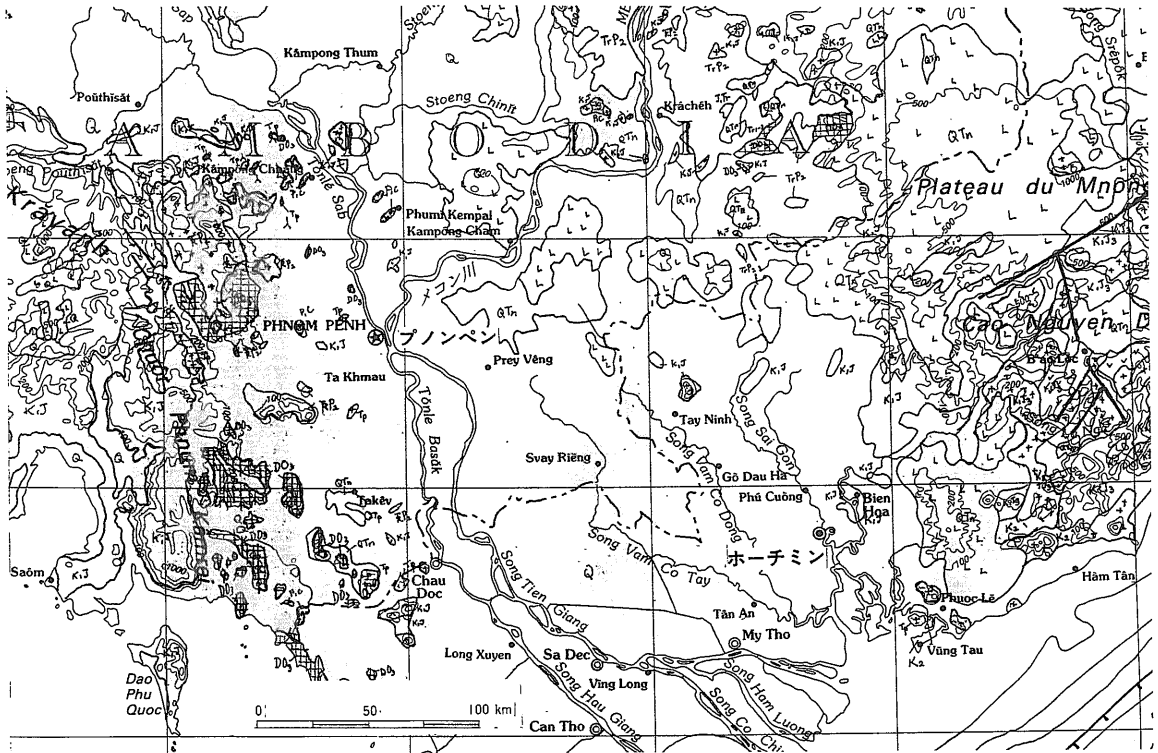
塗り潰す。

- 2-3) 再活動層序は変動の時代の色で点破線を分布域に書いて表わす。

- 2-4) 被覆岩類は堆積の始まる時代の色で横ハッチを分布域に書く。

3. 火成岩・変成岩はこの単位の中に組み入れ, 種類ごとに決めたパターンであらわす。特別な色は使わない。

一つの地質構造区域ごとに以上の単位の柱状図をつくり, 図の欄外に添える。これをTime-Space



第3図 東アジア地質構造図シートⅢの作業図(1/200万)の一部。ベトナム南部-カンボジアの一部。

Plot と呼ぶ(例として第2図参照)。

これらに加えて断層、褶曲軸、片理面、活火山、盆地の範囲、アイソバック、古地磁気なども出来るだけ図示する。

海洋地殻は、大きな層序単位を決めて、それに見合った色で時代をあらわすことにした。これはCPMPの南西区画で採用したのと同じ方法である。これは大陸地域のTime/Space Plotと一緒にして欄外に示す。

全体として普通の地質構造図と特に変わったところはない。しかし、時代を示す色とテクトニックな分類を示すパターンから、どこで、何時、何が起きたかなるべく直観的に分かるように配慮したつもりである。この図はテクトニックの解釈の際に基礎的な資料として使われるように意図して作ってある。したがってデータをきちんと載せて、解釈は使う人がそれぞれ個性的にやればよい、というのが基本的な考え方である。もともと、この図は東アジア地域の堆積盆地の地質的な背景を示す意味があったから、こういう方針は妥当なものであると思う。

編集作業の進捗状況

百聞は一見にしかず、どんな地質構造図かは見ていただくしか方法がない。その一部を第3図に示す。この原図は、2月から3月にかけて作っていたシートⅢである。図の外になるが、ベトナムと中国、あるいはタイの国境で苦心しているし、またミャンマーの東北部は、ほかの地方とくらべて情報の量が極端に少ないので、区分のしかたが大雑把になるなど問題も多く残っている。

この図は5月の末にハノイであったCPCとベトナム地質調査所共催の「ベトナムおよび隣接地域の鉱物資源の地質・探査・開発の可能性」というワークショップに持って行って展示し、編集方針などの説明をしたものである。ベトナムの地質調査所次長のTran Van Tri氏はベトナムのNational Compilerであると同時に、ラオス・カンボジアの部分も担当してくれ、この地域ではリーダー的な存在であった有能な地質家であるが、原図を見ているいろいろコメントをしてくれた。ただ、地名の表記については神経質で、出版する時には相当神経を使わされるこ

とになる予感がする。展示は僅か3日間であったが、多くの人が興味を示し、何時出版されるか、出版されたくないか、印刷前のドラフトのコピーは入手できないかなどという問い合わせが10件くらいもあった。印刷前のコピーはいろいろデリケートな問題があってお断りした。また原図の複製1部をCPMPに、もう1部をCCOPに報告書の代わりとして届けた。

シートⅢ以外のシートも最終的な編集作業に入っている。残されたシートは1枚の中に含まれる国の数も少なく、それだけ国境沿いの不連続などという難しい問題は少ない。また、National Compilerがすでにほぼ完成した原案を届けてくれているので、残された仕事は主として全体の統一をとることである。シートⅧ(パプア・ニューギニア)を除いて、全体の原稿ができるのはそう遠くないものと希望している。

印刷の問題

さて、できた図を印刷するについては、費用の問題が難問として立ちはだかった。このプロジェクトがCCOPとCPCの共同プロジェクトとして実施されていることからすれば、印刷はCCOPかCPCあたりで面倒を見てくれるのが一番の筋である。しかし、どうもどちらも金がないという。そこで、調査所でなんとかできないかということになって本座栄一氏が働きかけている。

ハノイのワークショップに展示したシートⅢは、出席していたCPC会長のE. Mark氏の注意も引き、なんとか資金を集めて印刷発行しようという意欲を示したそうである。これが実現すれば、少なくとも各国のNational Compilerの努力は報われることになる。本来このプロジェクト発足の時の約束で、私は学術的な面についての責任者にはなるが、事務的な面、なかんずく財政的な面で責任をとれるような立場に無く、それは北西区画パネルにお任せすることになっている。幸い、なんらかの形で公表できるよう、現北西区画パネル議長の盛谷智之氏(現住友建設)が努力しておられるので、望みもっている。

これからの世界的な趨勢として、こういう種類の図はデジタル化して、CD-ROMとして配布するというのも一つのやり方である。デジタル化すれば、そこから必要なデータだけ抜き出して用いることも簡単であるし、欲しければプリンターを通して印刷することもできる。またその方がコストも低く抑えられるという利点もある。もともとこの計画の勸進元の一つであるCCOPでは、バンコクの事務局でデジタル化するつもりであったようで、原図ができたなら送れという指示を何度か受けている。しかし、人手や機器の不足から、そう簡単にデジタル化できそうもない感じである。USGSか、いっそのこと調査所でやることも検討している最中である。

また、この図には説明書をつける計画である。インドネシアとフィリピンの場合National Compilerがすでに原案を作ってくれているので、問題はあまりないが、そのほかのシートについてはこれから作ることになり、只今は私一人でドラフト作りをやっている段階ではそこまでなかなか手が回らず、まだまだ時間がかかる見込である。

おわりに

こうして、東アジア地域、特に太平洋沿岸地域の地質構造図を200万分の1でつくろうという計画はほとんど完成間近までこぎつけた。この仕事にだけ打ち込んでいれば、もっとはやくできたとは思いますが、本業が他にあってそちらをおろそかにするわけには行かないのを考えれば、ここまで来たことをよしとしなければなるまい。印刷公表という最後の難関がまだ控えているが、残りのシートの原図をはやく完成させて、これだけ出来ているぞということ出版(ハードコピーにせよ、CD-ROMにせよ)を促進するのに役立てたいと思っている。また、長年月に渡って協力してくれた各国の委員の努力を無にはできない。大方のご声援をお願いしたいところである。

SATO Tadashi (1994): East Asia Geotectonic Map Project.

〈受付: 1994年8月22日〉